

【6】考察と今後の課題

1 小学部の子どもたちの変容

具体的な実践場面や個々の子どもたちへの取り組みについては、先の実践事例で述べたとおりであるが、小学部全体としては以下のような変容が見られた。

- **子どもたちが、その経験や力に応じて学校生活に見通しをもって臨むようになってきた。**
高学年の子どもたちはこれまでの経験から、低学年の子どもたちは教師の適切な提示を聞いたり高学年のまねをしたりするなどの繰り返しの中で、少しずつ見通しを持って次の活動に移れるようになった。また、「次にはこんなことがある、だからこれをしよう」「こんなことをしてみたい。もっと楽しくするには、こんなことを考えたり、準備したい」というような見通しの上に立った行動や考えを持つ子も見られるようになり、積極的に活動に参加できる子どもたちが増えてきた。
- 自分のやりたいことだけに集中するのではなく、周りの友だちや教師と関わることでもっと楽しいことやいいことがあると感じるようになった。
そして「次はこんな楽しいことがある」との思いから、今やっていることに**自制心を持って**当たれる子どもたちも増えてきた。特に、高学年になるにつれて、**他からの規制ではなく自分と対話しながら**周りとの調和を図っていく態度が少しずつ身についてきた。
- **クラスの中だけでなく、クラスを越えた子ども同士の遊びや教師との自然なふれあいが多くなった。**高学年の子どもたちは、遊びの時間などに自分たちだけでなく学部みんなで遊ぶための道具を作製したり、準備したりするようになった。低学年の子どもは、そんな高学年の子どもたちにあこがれたり、まねたりして、一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。
- **日常生活の場面でも、身近な教師（担任や学部の教師）や友だちの間のコミュニケーションが活発になった。**自分の思いが伝えられた、理解されたという体験や、みんなで楽しい活動をした経験が「また一緒にやろう」という意欲を一層高めていった。
- 話しことばを持たなかったり、発音に問題があったりして、ともすれば、しだいにコミュニケーションに自信を失っていきがちなる子どもたちも、**周りの支えによって、人と関わろうとする意欲を失わず**、楽しく学校生活を送ることができた。
- **未熟な表現でも、受け入れられたという思いは**、もっと伝えたいもっと関わりたいという意欲を高め、案内状や招待状を書くなどの身近な人と、文字によるコミュニケーションの学習にも意欲を持って取り組む子どもが増えた。

これらの変容については、次のような取り組みが、効果を上げたものと考えられる。

教師の対応

教師が、コミュニケーションの問題は「子ども自身の発達や障害の問題だけでなく、その相手となる身近なクラスや学部の教師の問題でもある」と考えるようになったことである。その結果、教師の側が、子どもたちのわずかな表現を読み取ったり、伝えたいという気持ちを大切にしようとするこ

が以前にも増して定着してきている。そして、子どもたちに受容的に接することが多くなり、一方的に課題を押しつける場面が減ったことである。この考えには、1年次のインリアル研修が参考になった。

授業づくり

授業づくりの取り組みにあたっては以下のことを大切にしてきた。

- ・1年間、そして小学部の6年間を見通して繰り返しを大切に単元の設定
- ・これまでに子どもたちが経験したことのある題材と新しい題材との意図的な組み合わせ
- ・興味・関心を引きつけるような教材提示の工夫
- ・個々の子どもたちが力を出せる場の設定
- ・個々の子どもたちの課題を踏まえた補助的指導者の適切な援助
- ・クラスや学部の友だち同士の関わり合いを意図した指導
- ・見通しを持って活動できるような場の設定

その他

- ・家庭との連携
- ・言語環境の整備

2 考 察

この研究は話しことば、書きことばといった表現に留まらずコミュニケーションを対象としたことで、「友だちの中でよろこんで取り組む子」という小学部の目標にそのまま合致し、日常の実践そのものが研究活動と結びつくものであった。単に、ことばを引き出すとか、話せるようにすることだけに力を入れることは、ともすれば、うまく伝えられるようになったが伝えたいことがあまりないとか文字が読んだり書けたりするようになったが日常生活の中で生かして使うことができないということになりがちであると考えられる。しかし、人と関わろうとする意欲を大切にすることで、子どもたちの全人格的な発達が図られ、身につけたことばの力や表現の力を生活の中で生かし、いきいきと活動する姿が見られた。また、他人とのコミュニケーションだけでなく自分との対話の力をねらい、自制心や自己客観視といった自分づくりに結び付けたことは、子どもたちの発達を促しただけでなく、教師にとっても次の指導の見通しが立てやすく、本校のめざす社会的自立への道を明らかにするのに有効であったと思われる。

3 課 題

不十分な点は多々あるが、今年度で一応このコミュニケーションの研究は終わる。この研究の成果を生かしつつ、以下のことに今後も引き続き努力していきたい。

- ・子どもたちと上手にコミュニケーションをとれるような教師の対応を工夫していく。
- ・子どもたちの意欲を引き出し、大切に育てる教材の選択や教育課程の編成に努める。
- ・子どもたちが他者とのコミュニケーションだけでなく自分との対話を通して、成長していけるように見通しを持って指導する。